

The TENDAI journal

発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長 寺本 亮洞
〒520-0113 大津市坂本 4-6-2
天台宗務庁内 電話：077-579-0022(代)
Eメール：T-Press@tendai.or.jp

平成30(2018)年6月1日 金曜日
(毎月1日発行) 1部50円(消費税込・送料別)

天台ジャーナル



広報天台

善光寺大勸進問題に関する決議文を採択

第142回臨時宗議会



7年に1度の「善光寺御開帳」。参拝者で賑わう善光寺本堂前(2015年)

信仰の寺として、早急なる正常化を求める

新宗議会議員選出後の初めての議会である第142回臨時宗議会が5月17日に開催された。同宗議会において、善光寺大勸進・小松玄澄前任職の進退問題に関する決議文を議員全員一致で採択、事態の正常化に向け、議会としての立場を明確にした。(3面に関連記事)

小松前任職は、以前より数々の問題で、善光寺一山側と対立を深めており、2016年には、善光寺一山並びに信徒総代から辞任勧告がなされるなど、混乱は収まることがなかった。こうした中、昨年12月に小松前任職から勇退の意向をもって退任届が出されたことを受け、天台宗は去る3月31日付で解任辞令を大勸進に送

付、4月1日付で瀧口宥誠副住職を特命住職に任命している。

その後、4月18日に一山会議は瀧口特命住職を次期住職として推挙、同21日の一山住職や信徒総代らで構成する「大勸進協議会」において、瀧口特命住職は正式に次期住職として推挙され、信越教区に申請書が提出された。これを受け、天台宗は5月1日をもって住職任命の辞令を交付した。

信頼回復を願う

こうした中、小松前任職が地位確認の仮処分を求める裁判を起こすなどの状況を憂慮した天台宗宗議会は、早急な

る事態の收拾と善光寺の信頼回復を願う決議文を5月17日の第142回臨時宗議会において採択した。決議文は細野舜海議員が発議し、全会一致で採択された。問題の解決に向け対応してきた杜多道雄宗務総長は「天台宗としては、宗規に則り、粛々と対応してきた。新しい住職も就任されたことでもあり、一日も早く信仰の寺としての信頼を取り戻すよう願うばかりである」と語っている。

新しく住職に就任した瀧口師は84歳。昭和8年、山形県生まれ。叡山学院研究科卒。延暦寺一山南山坊、竜珠院、善学院の住職を歴任。平成14年から善光寺大勸進副住職。大僧正。

善光寺大勸進問題に関する決議

長年に亘る善光寺大勸進と小松玄澄前任職との対立は、善光寺如来のご威光を貶め、信徒の信仰に水を差す行為であり、宗教界のみならず、一般社会からも響きをかき、参拝者の減少の一因ともなっている。

よって、宗も事態打開に尽力し、大勸進関係者も譲歩し、小松師は辞職することを確約して辞任願も提出し、長年の混乱に收拾が期待できることになった。ところが小松師は、辞意を撤回したと主張し、本宗に対して大津地裁に、また大勸進を相手取って長野地裁に、次々に地位確認の仮処分を申立て、全面対決の姿勢を示すなど、徒に混乱を長引かせる言動は容認しがたい。

しかのみならず、マスコミの取材では、一方的な自己主張を繰り返す、天台宗及び宗内寺院に対する信頼失墜を招くという看過すべからざる由々しき事態も引き起こしている。

ここに天台宗宗議会は、小松師が、一刻も早い事態の収束に向けて宗門の方針に潔く従うよう強く求めるとともに、善光寺大勸進におかれては、こうした事態が二度と起こらぬよう運営に留意されんことを切に願い、ここに決議する。

平成三十年五月十七日 天台宗宗議会

極微

六月といえば、梅雨。鬱陶しい日々が続く季節だ。この時期に「六月を綺麗な風の吹くことよ」と正岡子規は詠んだ。梅雨でじめじめした時期に綺麗な風が吹くことはあまりない。それだけに、余計に梅雨のジメジメ感を思い出させる▼子規は、日清戦争に記者として従軍しての帰りに大喧嘩し、この句を詠んだ当時は療養中の身であった。小松状態が気分がいくらか良くなった心が反映しての句だろうか▼梅雨は鬱陶しくて嫌な季節だが、作物にとっては必要な季節でもある。「空梅雨」ということになる。作物に影響が生じ、人間の日常生活にも水不足の害がでてくる。かといって、最近よく起こるように、集中豪雨という極端な雨もいただけない。雨の少ない時期にその雨量を回すことができればいいのだが、無理な話である▼いくら科学が発達してきているといっても、まだ自然現象を統御できるところまでには至っていない。せいぜいが、人工的に雨を降らせることぐらいで、それよりも温暖化で地球の自然を狂わすことの方が問題だ。世界各地で天候異常が起り、季節外れの降雪や洪水の発生がニュースで毎年流れている▼やはり、異常な天候に悩まされるより、たとえ多湿で鬱陶しくとも、季節としての「梅雨」を味わうのが良いかもしれない。時には、綺麗な風に吹かれる喜びもあるのだから。